無機物恋愛

泉 飛白

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
無機物恋愛

【Ｎコード】
Ｎ１２４９Ｕ

【作者名】
泉　飛白

【あらすじ】
人形に憑依した女を愛した王子様のお話。　※　勢い、考え無しで物語を気紛れ更新していきます。

1

私は確かに人間だったと思うの。だって私には生前の記憶があって、甘いや辛い、柔らかいや固いとか感覚などがわかっていた。それに言葉だって理解していたんだから。

「――――」

ただこの身体になってからは感覚がなくなっちゃうわ、喋れないし言葉わからなくなって、とにかく大変。

「――――」

目は見える、それに動く事も出来ると思うけど動いちゃいけないと思うの。だって、私から見える範囲の身体が継ぎ接ぎのようだから。

脚はないけど腕がある、腕はあるけど手首がない。

「――――――？」

私は人間じゃない。だって人間の身体は替えがきかない訳じゃないけど、そこには生きている証があるはずだもの。

生きている人間には確かに赤い、紅い、アカが…

下を向いていた顔が誰かによって前に向けられて私が見たのは優しく微笑んでいる綺麗な女の人。その人は私に何かを言うがわからない。

意味もわからないけど泣きたくなった。だけど私は泣くことすら出来ない。

目の前の女の人のように私には血が流れていないから。だから、泣くことが出来ない。

痛いよ。死にたくないよ。もう、楽になりたい。そう死に際に思っただけだったのに。

神様は酷いよ。

◇　◇　◇　◇

五体満足になった私はあの女の人にドレスを着せられ、魔法か何かなのか私はペットボトルくらいまでに縮んでしまった。

後、しばらくして気づいたんだけどこの女の人は妊婦さんみたい。きっと名前はリリー。

「リリー、――――――」

聞き取れる名前に少しだけ嬉しく思いながら私は格好良い男の人が切羽詰まったような顔をしてリリーさんに迫っていた。なんか、こう…心配っていうのかな？

怖い顔して何かを言うイメージが強いその人はリリーさんを心底愛していると私は思うの。

そんな様子を見てもリリーさんはお腹を優しく撫でて微笑むだけ。

私はただ動くこともせずに見つめるだけ。何の感覚がないわけでもない。私は人としての感情をちゃんと持っている。

大丈夫。私が人であることを覚えてるかぎり私はただの人形じゃない。

2

私はずっと彼と共にいる。

「リディヤ、僕は王位などいらない。王になれば愛しもしない女を娶らなければならない」

スルリと流れるような動作で彼、アレクセイは私を抱き締めた。愛称はアレクでリリーさんとミハイル王の子供。リリーさんはアレクを産んだ五年後に亡くなってしまった。

アレクは私を酷く気に入っているらしく魔法で元に戻しては抱き締め、小さくしてはいつも持ち歩く。

リリーさん、息子さんが変な趣味に走ってしまうんじゃないかと私とても心底ですよ。というか息子さんにお人形を与えないでください！

お人形は女の子に与えるものです！

「僕は父上が嫌いだ」

顔に頬を擦り付けるアレクは両親に似て美人だ。アレクは今年で17にもなるのに私に執着している。

結婚出来なかったら私のせいだ思いながらアレクの長い銀髪を撫でた。

「リディヤ、僕のリディヤ」

アレクは私に依存してしまった。遊び相手がいなかったアレクに

私は遊び相手として初めて人前で動いた。私はアレクと共に言葉を学び、文字を覚え、この世界を知った。

私はいくら人の心を持っていても人形で人じゃない。

「愛してない女なんて嫌だ。僕はリディヤがいいんだ。ずっと、リディヤだけ」

私は長い銀髪を梳いている自分の手を見た。人のようなすべらかな肌があるはずもなくて、関節部分に部品同士の繋ぎが見えている。

「リディヤ、愛してるよ」

不意にアレクに口付けられた。感覚のない私には実感がないけど、とても胸が締め付けられる。

アレクのアメジスト色の瞳に見詰められると私は変な気分になる。

「僕はリディヤ…僕だけの瑪瑙《めのう》」

私のリディヤという名前はリリーさんにつけてもらった名前。そして、瑪瑙は私の生前の名前だ。

「なぜ、瑪瑙は僕を愛してくれないんだい？」

長い黒髪を指で遊ぶアレクは悲しげな表情をして、私にもう一度だけ口付けをしてベッドの中に丁寧に私を誘い入れた。

感覚のない私にはわからないけど、アレクは優しく私を抱き締めると瞳をゆっくりと閉じた。

アレクは私のためになら何でもしてくれる。私の悲しむことや怒

られることは絶対にしない。

本当は私も愛してるなんて言えない。だって私達にはどうしても越えられない壁があって、いくら好き合っても許されない愛だってある。

私は約束したんだ。リリーさんと約束したから。だから、脆くてすぐに駄目になって壊れてしまう私じゃいけない。

アレクを、貴方を愛する人はちゃんと生身の暖かな人でなくては、人の形だけを模した私なんかじゃいけない。

貴方の温もりも感覚も香りも、本当の貴方の優しさすら知らない、わからない私には貴方をアレクセイという人間に恋するなんて出来ない。

私は人間に焦がれるばかりの哀れな人形でいたい。

愛する人の名前すら声に出せない、愛する人の温もりすら感じることができない、愛する人が抱き締めてくれるのに、その感覚がわからない。

痛くてたまらない。そんな感覚を感じることが出来ないのに私は、勝手に自分で心に傷を付けていく。

私に許された唯一の心が、今の私には苦痛でいらないモノです。

だから。

「　　」

私はアレクに声を伝えられません。

私はアレクに愛を届けられません。
私はアレクに心を見せられません。
私はアレクを愛してはいけません。
「　　」
なのに。
私の声は振動しません。
私の愛は暗闇の中です。
私の心は泥沼の中です。
私の愛は連動しません。

色彩と唇だけはミハイル王、顔の造形はリリーさん、スラリと伸びた四肢、男らしい手、誰もが貴方をアレクを羨む。
私は貴方を見るたびにリリーさんを思い出すの。私を造った生みの親。

リリーさんを憎んではいない。あの人が私をここに縛り付けた訳じゃないから。
死にたくないと思って縋ってしまったのは私だから、今になって思い出してしまったとても嫌な断片の記憶。

3

「踊ろう、リディヤ」

差し出された手に自分の造られたを乗せたが私はいつも心配で仕方がないことがあるの。アレクに触れるたびに力加減はどうなんだろう？

優しいアレクは痛くても顔に出さないだけで、声に出さないだけで、痛いんじゃないか。

「ふふ、僕はダンスは瑪瑙としか踊らないんだよ。こんな風に他の女と踊るなんて考えられない」

密着して私に語りかけるアレクの声はいつも優しくて、それでいていつも彼は残酷だ。アレクが優しいのは私にだけ。

一緒に覚えたダンスを軽い足取りでステップを踏みつつ、優しい音色で彼は語る。

「僕には瑪瑙がいるのに醜い女達が酷い臭いで寄ってくるんだ。僕の瑪瑙に匂いが移ったら殺したいといつも思ってるんだけど、瑪瑙は優しいからね」

そんなことは絶対に望まない、と寂しげに言って見せたアレクは絶対に可笑しい。

幼少時から人形の私を大切にしていたアレクは私を壊したメイドをクビにした。まだ幼いのにリリーさんやミハイル王にちゃんと言ったんだ。

『ぼくのたいせつなリディヤをこわすメイドなどいらない』

『じぶんのことはじぶんでします』
『だから、あのメイドのくびを――』

彼は素で私以外はどうでも良いんだ。アレクが私は動けるということを知らないうちから大切に思っていた。
リリーさんに何か言われたわけではないのに、それから彼は私を常に持ち歩くようになった。

「リディヤが動いて僕のことを理解してくれることを知って嬉しかったんだよ。何度も言ったけど、リディヤが名前を教えてくれたのも凄く嬉しかった」

甘く私に優しく囁くように言う。この身体では声だけが私に直接触れるということを理解しているアレクは、物腰柔らかな落ち着き払った甘い聞き取りやすく浸透しやすい、悪くいうならば中毒性のある声で囁く。

「瑪瑙、僕だけの瑪瑙」

彼しか私の名前を知らない。

彼しか私のことを知らない。

「僕は君だけのモノだ。だから、ね」

無邪気に笑う彼は私しか見ていない。自惚れでもなんでもない真実に心が痛む私にはそれを伝える術はない。

「君は僕だけのモノだよ」

怒ることも、悲しむことも、笑うことも、泣くことすらも出来ない人形だから。

◇　◆　◇　◆

僕には愛すべき女性がいる。どれほど彼女の声を聞きたいと願っても聞くことが叶わない。

何故リディヤは、瑪瑙は僕の愛に応えてくれないのだろうか？

「ああ、愛しい瑪瑙」

踊ることを止めて抱き締めた。優しく壊れないように傷つけないように、腕の中に包み込んだ。

瑪瑙は前に教えてくれた。自分には感覚がほとんどないのだと、自分にあるのは心と聴くことだけだといった。

こんなに優しく触れていてもわからない、僕が触れていることすらわからない。どういう風に触れているのか理解することがない。

リディヤの基礎はマリオネットだ。魔法を用いて操る人形の為に指などの細かい関節もある。等身大で作り魔法で小さくすれば素晴らしく精巧な人形になる。だがリディヤは等身大の時から精巧に造られているのだ。

母上が造ったのは人間だ。計算されて目立たなくされた関節部。瞳も特殊の加工、髪も人工、肌の色も素材も全て母上が造り上げた。

「瑪瑙」

僕だけのために造り上げられたリディヤには瑪瑙が宿った。違う、瑪瑙がいたからこそリディヤは造られたんだ。

例えこの気持ちが瑪瑙にわかってもらえなくても僕は諦めることは出来ない、諦められはしない。だから瑪瑙をずっと傍にいさせる。

彼女を愛している。それに嘘偽りなんてある訳ない。僕の魂が心の底から瑪瑙が欲しくて仕方がないと叫んでいる。

僕はきっと瑪瑙しか求められないし、他はいらない。邪魔にしかならないそんなモノなんていらない。

4

アレクの肩に乗り私は周りを見つめた。貴族の令嬢がアレクをダンスに誘おうとしているけど彼はそれに答えない。
そんな誘いに見向きもしないアレクはグラスを傾けて飲み物を楽しんでいた。その瞳には絶対彼女は映っていない。空になったグラスを置き、私を魔法で元のサイズにしてアレクは私の手を取った。

「踊ろうか、リディヤ」

甘い笑みを浮かべたアレクに周りの令嬢は顔を紅く染めてる人もいれば気絶してしまうなど様々な反応が返ってくるが気にとめもしないアレクには感心する。

「今日も綺麗だよ」

ふと視界にミハイル王が入った。ミハイル王はアレク、アレクセイをどうするつもりなんだろうか？
息子なのに誕生日にすら会いに来ないミハイル王は何を思っているんだろうか。リリーさんを思い出すからアレクに会わないの？

「少しベランダに行こうか。少し疲れてるんじゃないかい？」

思考が暗い方に進む前にアレクは私にそう進めてきた。表情も何もない私の感情を読み取るのでビビる。
確かにあの記憶を思い出してからは気分はあまり良くはない。

「気分転換になるよ」

確かにそうだ。コクリと頷くと淡く微笑んだ姿にリリーさんが重なって見えた気がして、身体が揺れそうになった。

「…どうかした？」

ふるふると顔を横に振り私はそっとアレクに寄り添った。私は肝心なことを思い出せてはいない。

ベランダに行き空を見上げれば星が煌めいていた。私のいた世界ではこんな綺麗な星空は見られなかっただろうな。

「綺麗だ」

こういう場ではコミュニケーションを取れないが流石に長年一緒にいるだけあり、お互いのことはわかる。いや、アレクの場合は全て口にしてしまいがちだ。

私以外には無口というか無駄口を言わずに淡々と話すが、私には饒舌で何より音色が違う。

どちらにしても聞きやすく耳に残りやすい声だが印象が違う。

「アレクセイ様、少しよろしいですか？」

「…何のようだロベルト」

「例の件でお話があります」

その話にピクリと反応したアレクは私にここで待っていてほしいと申し訳無さそうに言うとリーリヤを私に付けてロベルトと話すために行ってしまった。

ロベルトはアレクの護衛をしている騎士でそこそこ親しいみたい。リーリヤは女騎士でロベルトの幼なじみ。

「宜しくお願いいたします、リディヤ様」

前に無理やり政略結婚されそうになったらしいけど、今の仕事のお陰でその話しはなかったことになったみたい。そのことに相当感謝しているリーリヤはただの人形の私相手にも敬意を持っている。

前の女騎士はアレクに不満を洩らしていたのに、リーリヤは凄い。

アレクはたまに私から離れて騎士などとかと話すことがある。数年前からの出来事でアレクも私には言えないことがあるんだなと考えていた。アレクは王族で王の世継ぎだから普通のことだと思った。

「あれぇ、1人なのキミ？」

「…この方に近付くな、貴様」

景色を見ながら考え事をしていたらリーリヤの声が聞こえて私は思わずゆっくりと振り向いた。その視界にアレクが入ったのだからリーリヤは違う人と話してるということか。

赤毛の男だ。しかもその笑みは上っ面だけで如何にも遊んでます、みたいな人に私には見えたが顔は良い。ただし、アレクと比べたらちょっと劣るというか引き立て役くらいだ。

「可愛いねぇ、2人とも美人じゃん」

「貴様っ、これ以上この方に近づくなら斬る！」

「そんな堅いことといわないでさぁ」

剣まで抜いたリーリヤを見て流石に歩みを止めた男は私をジッと見て驚愕して見せた。そして顔色を青ざめさせた。

「アレクセイ殿下のリディヤ」
「僕のリディヤを呼び捨てにするな」
低く這う声が聞こえると同時に私の身体を引き寄せたのか視界が変わる。
「…行こう、リディヤ」
いつものようなゆっくりとした話し方ではなくて、何か焦っているように少しばかり早口でアレクはそう言い。私の手を取り歩いていく。そして思い出したようにリーリヤにロベルトの元に行き手伝ってくるように命じた。
足の長さのせいで私は小走り通り越して走ってる。だってアレクは早足で自室へと一直線といった感じで私を小さくする気配はない。変だと思ってもそれを私は彼に聞くことも出来ずただついて行く。
やっぱり長く靴を履いていると足の感覚が可笑しいというか歩きにくい。まして、私は走ってるんだ。
「……」
普通では有り得ないくらいに取り乱した風のアレクは自室に行くまで私のことを気遣うことはなかった。

5

自室に付き振り返ったアレクの顔は蒼白になった。私の手を優しくさすり、足元を見た瞬間に泣きそうな顔作った。
私も見たが来る途中で靴が脱げただけみたいだった。

ベッドの縁に腰掛けてだいぶ落ち着いたように見えるアレクは小さく話し出した。

「…僕は嫉妬深いようなんだ」

不意に苦々しい表情を作り、弱々しくも甘い声でアレクは私をまっすぐと見つめた。その瞳には戸惑いで溢れていて思わず首を傾げた。

こんなことは初めて。

「リディヤの視界に入る男を殺してしまいたいと、いなくなってしまえばいいと思った。それと同時に…瑪瑙にも思ってしまった」

戸惑いは恐怖に怯え、声は震え、自分の身体を抱き締めた彼は喘ぐようにいった。

「リディヤの瞳を抉り取ってしまえば瑪瑙には見えずに済むんじゃないかと…僕の我が侭で付き合わせているのに」

そう言えば随分前にアレクは言っていた。その話はただ一回だけの会話だった。

『瑪瑙を皆の前に晒すのはいやなんだ。だけど、僕が瑪瑙のモノだと知らせるにはこうするしかない』
『瑪瑙が他の男の目に映るのは殺してしまいたいくらい許せない』
『瑪瑙が僕のモノだと知ってもらいたい』『君を、瑪瑙を守りたい』

純粋な笑みを浮かべたアレクはただそう言っていたはず。ただの幼稚な独占欲だと思った。だって彼には私しか心を開ける相手がいなかったのだから。
他には誰もいなかった。

「僕は瑪瑙を傷つけたくない。本当に本当だよ？」

泣きそうな程に歪んだ顔。私は良くわからなくなってしまいそうで目を逸らしたくなった。だけど、約束があるの。

「昔から僕は嫉妬深い男だ」

無理に笑おうとして顔が変に歪む。そして場違いだが、美形はやはりどんなに顔が歪んでも美しいとか思えてしまうのかと思った。私が歪めたら見るにたえなくなりそうなのに、ズルい顔だ。

アレクは私がどんなに顔を歪めたところで得意の盲目さで美しいや可愛らしいと褒めそうだが、個人的には嬉しくはない。その美貌でどう私を美化しているのだろうと疑問に思う。
なんて話は止めよう場違いにもほどがあるから。

そしてなんとなくアレクが言いそうな言葉はわかったから。

「だけど、瑪瑙を傷つけたいなんて間違っても思わなかった」

いつでも私はアレクに優先されていた。だけど彼は気づいてしまったのかもしれない。

そしてそれに戸惑ってる。

「だって僕は瑪瑙を愛してるから、傷つけたくない、離れたくない、傍にずっといたい！」

そしてそれに、怒りを感じている。

「その為なら、僕は、どんなことも、出来る…」

アレクの瞳から一滴だけ涙がこぼれた。拭うこともせずに私を抱き締めた。

「僕は、酷い男だ」

私は黙ってアレクの頭を撫でた。

それしか私には出来ない。私の為に用意された筆記用具は届かないし、今はこれの方がいい。

「リディヤの替えなんてない。壊してしまったら元通りなんてならないんだ。リディヤが壊れたら瑪瑙はどうなる？」

わからない。私には心臓がないからどこが弱点だとか言いようがない。

「もしどこかが壊れたことで瑪瑙がいなくなったら、そう考えただけで恐ろしい」

確かにどこかに私の核があるかもしれない。それが壊れたら私はこの身体から消えるかもしれない。
痛みなんて感じない。だからもしかしたら壊れかけていたって私にはその感覚がわからないから、次の一瞬には消えても可笑しくない。

「それなのに、おさまらない。僕はいつか瑪瑙を傷つける」

潤んだ蒼い瞳が私を見つめた。怯えている姿に私は顔を近づけた。アレクの額に私の唇を寄せた。決して私は人のように柔らかくも暖かくもない。

固く冷たいのだと知っている。私では暖は取れないと、とうの昔に知ってる。

6

リディヤ。
僕の母上がくれた人形の名前。漆黒の艶やかな髪に深い闇の瞳、黄色肌の小柄な少女の人形。

始めの交流は母上が亡くなったときくらいからでリディヤが僕を慰める物だった。それからずっと一緒に遊んだ。魔法で動かしていると嘘をついていつでも一緒に過ごした。
剣の稽古もリディヤが見てくれるとよりいっそう頑張れた。魔法も勉強も色んなことを頑張ってリディヤに褒めてもらいたかった。

父上は母上を亡くしてからは話さなくなり、会わなくもなった。だけど僕にはリディヤがずっと傍にいてくれた。
小さな姿のまま僕を励まそうと筆を懸命に抱え込んで文字を書いてくれたリディヤこそが僕の全てだ。

『ぼくがおおきくなったら、リディヤをおよめさんにしてあげる』

リディヤは、瑪瑙は僕がそう言ったことを覚えているだろうか？
所詮、子供がいうことだと本気にしてもらえずに忘れてしまったかも知れない。だけど、僕は本気なんだ。

瑪瑙の為なら僕は何も惜しまない。

『リディヤがだぁいすきだよ』

心が打ち解けていくとリディヤは何かしら凝った絵のようなモノを書いた。

それが〔瑪瑙〕。

自分の本当の名前だと教えてもらい僕はどれほど喜び、そして誰にも聞かせたくないとその名前を言うときは周りを気にした。

皆に自慢するように肩に瑪瑙を乗せて歩くようになった。僕は一度もリディヤを魔法で動かしたことはなかった。動くと知らなかった時は腕の中に抱えて持っていた。

だからか、人形劇を生業としている魔術師が動かしてみましょうなどと言ってくる者もいるし、盗もうとする輩もいたがそれらがリディヤに触れることはなかった。

たった一度だけ僕の愛しいリディヤに触れたメイドはもうこの世にはいない。落とされて痛かっただろうと後に聞いてみたが痛みはない、そう瑪瑙は言った。

痛みも感覚も何もないと、心と音しか自分にはわからないと言ったから僕は声には気をつけた。瑪瑙に心地良い声を聞いてもらいたいそれだけ。

僕の世界には瑪瑙がいるだけで全てが正常に機能する。それだけで幸せで満足だった。

ゆっくりと僕は瞼を開けた。眠ってしまったみたいだが、あまり時間は経っていないようだ。窓から外を見つめる瑪瑙の横顔が綺麗で見つめていたら気づいたのか、ゆっくりと僕の方を向いた。

〔大丈夫、アレク？〕

それに何も答えず頷いた僕を見た瑪瑙はまた何かを書き始めた。
人のように見えるその仕草は僕の心を締め付ける。脚を進め腕を伸ばせばリディヤに触れられる。だけど、瑪瑙には触れられない。

〔顔洗って、着替えようか。目は覚めちゃうかもしれないけど〕

ハッとした。瑪瑙の前で歳がいなく泣いてしまったんだと思うと恥ずかしくて仕方なく、勢い良くベッドから降りて顔を洗うために早足で向かった。

恥ずかしい！

もう顔真っ赤に違いない。だって小さい頃は涙腺緩いのか良くわからないけど、すぐ何でもないのに泣けた。
今思えばほんとに情けないしカッコ悪かったけど、瑪瑙が猫可愛がりしてくれたからいいんだ。

「…僕のこと、瑪瑙はどう思ったんだろう」

あんな訳わからないことを言われて、気味悪いと思っただろうか？

「瑪瑙、君はどうして」

僕にキスしてくれたんだい？
唇じゃなくて額だったけど、それでも嬉しかった。

「あ…」

なんだろ、しばらくは瑪瑙と目が合わせられないかもなんて思いながら僕はしゃがみ込んだ。

とりあえず落ち着いたら出て行って話し合おう。眠くもないし、ゆっくりと瑪瑙と落ち着いた状態で話してわかってもらおう。

わかってもらうも何もないような気もするけど。

7

「瑪瑙」

静かな空間に響いた。やっと出てきたアレクはお風呂にでも入ったのか髪が濡れていた。

〔髪渇かさなきゃ、アレク。風邪引いちゃうわ〕

「あ、うん」

ガシガシと乱暴に髪を拭いていくアレクは無表情だ。というより、心ここにあらずみたいなようで毛先は雫が垂れている。

そんなアレクを見てはいられず無理矢理奪って変わりに拭くことにした。

「わっ、め瑪瑙っ！？」

慌てた声を出したが無視を決めこみ長い髪を拭いていくとアレクは大人しくかかんだ。

「ありがとう、瑪瑙」

照れくさそうに頬を赤らめたアレクはぷいっと視線を逸らした。

「僕のこと嫌いじゃないよね？」

〔嫌いじゃないよ。アレクのこと嫌いになんてならない〕

「本当？」

こちらをキョトンとした顔で見てくるアレクにこくりと頷く。

「…だって、僕は瑪瑙を傷つけるかもしれない」
〔傷つけないかもしれないでしょ〕
「それは、そうかもしれないけど…そんな男が四六時中一緒にいるんだよ？」

私だって持ち主がアレクだから良いけど他だったらとっくに壊れてたかもしれないんだよ。
アレクが私を大事にしてくれるからこそ安心して眠れるんだから。これでもずっと起きてるわけじゃないんだよ。

〔私、アレクのこと大好きだよ〕
「え？」

ピタリと止まったアレクは瞬きしかしない。こう動かないアレク見るとお人形みたいに見えるな。
売り出したらうなぎ登りだよ、絶対。

〔リーリヤもロベルトもみんな大好き。私はこの場所も景色も全部。だから守りたいの。傷ついたって私は大丈夫、消えないよ絶対〕

多分絶対！　とは書かないで置こう。話しがややこしくなるていうか長引きそうだし面倒だしね。

〔私だって大切な者のためなら傷つく覚悟があるの〕
「…瑪瑙」
〔だから、気にしないで〕

正直に言うならアレクって過激だったんだね。アレかな、ヤンデレ？

どうしてそんな子に。私アレクをそんな子に育てた覚えはありません！

〔ほら、寝なさい。身体はちゃんと休めないといけないんだから！〕

「あ、え」

〔寝なさい！〕

ぷいっとそっぽを向いてベッドを指さすとアレクはクスリと笑った。

「うん、お休み瑪瑙」

〔おやすみなさい、アレク〕

とりあえず身の振り方を考えようかな。なんか、苦しくなってきたし…。

7（後書き）

この話をちゃんと書き直そうと思います

改訂版をそのうち気が向いたら書き始めます

でもこれは出来悪くても最期まで連載したい気もします

とりあえず一番最初の連載を搭載して削除したのが気に病んでる

訳ではないんですが

執筆中の所に増幅され置かれているし…

とりあえず

あまり削除はしたくないのでそこそこな文字数で変な文章で進みます

見切りをつけるならお早めに！

8

珍しく私の隣にはアレクはいない。何でもちょっと野暮用があるからと言って剣を持ってどこかに行った。爽やかすぎる笑顔だったのにどこか怖かったのはなんでだろうか？

「リディヤ様は編み物がお上手なのですね」

〔リーリヤもやってみる？〕

人形の私がどうしてアレクもいないのに動けるかと不思議な感じに最初はリーリヤも戸惑っていたが、人間のような普段の仕草に私のことを話してもあまり驚きはしなかったという。

ロベルトもそうだったがみたいで、私はそんなに人形らしい動きではないみたい。

〔ロベルトの為に編んでみたら？〕

「なっ！」

顔を一気に真っ赤にしてリーリヤはそのまま黙って俯いて隠そうとしたが耳が真っ赤だ。普段は凛々しい彼女からは想像できないレアな姿！

予想以上に可愛らしい反応にキュンとしてしまった。

〔喜ぶと思うよ、ロベルト〕

にゅっと腕を伸ばして見せるようにするとおずおずとリーリヤが顔を上げた。

「リディヤ様はアレクセイ様を愛していらっしゃるんですか？」

いや、凄い流れ弾来ちゃった。
そりゃああれだけ想われて愛されたらクラッと来ちゃいそうだよね。アレクって美形なんだし。
でも、どれだけ私を大事にしてくれても私は答えないって決めたの。

〔それって家族として？〕
「いえ、恋愛としてです」
〔私は赤ちゃんの時からアレクといるからよくわかんないよ〕

本当、どうしてアレクは私を愛し始めたんだろう。
不思議だと思う。人間ではない私をどうして、ずっと一緒にいた私をどうしてあそこまで愛することが出来るのか。

「…そうですか」
〔でも、アレクはとても大切だよ〕

そう言うとリーリヤはまだ赤い顔で優しげな笑みを浮かべた。

〔リーリヤは愛するロベルトのために編み物しなきゃね。私が教えてあげるから！〕
「えぇ！？」

8（後書き）

没ネタにしようと思ったけど
とりあえず入れてみました

一応打った話しだけは勿体ないから
頭の中は事起こす前だからアレだけど

こんな私を見切るなら今しかない！

9

どこかに颯爽と行ってしまったアレクだけどなんとなくだけどわかった気がする。
アレクは普段はいつも微笑んでるというか穏やかな印象しか私にはない。だから、殺伐したアレクなんて想像も出来ない。

リーリヤに尋ねても教えては貰えなかった。

「アレクセイ様はきっとリディヤ様には知られたくないのでしょう」
〔どうして？〕

私は知りたい。どんなことをしているのか、とか私は全部知っていたい。知っておきたい。

「それは私にも…」

そうだよね。アレクの考えることなんて誰にもわからないよね。
だって、私が何を考えているかなんて誰にもわからない。

「男の勝手な理想じゃないですかね」
〔理想？〕
「はい。美しいままで、無垢なままでとか好きな女性はずっと綺麗なまま穢れて欲しくないんです」

女は男が思ってるより綺麗じゃないし、弱くもない。

〔なんていうか、馬鹿だね〕
「男は馬鹿な生き物です」

〔ロベルトもそうなの？〕

そう訪ねてみればまた顔を赤くしたリーリヤが照れ臭そうに話し始めた。

「いえ。どちらかというと彼は私を貶してきますから。料理も編み物も女性らしい仕草も出来ませんから」

〔…ロベルトはああ見えてサディストなんだ〕

結構なかなか綺麗な顔立ちで物腰も騎士にしては柔らかく、間違いなく優しげなロベルトが毒舌キャラだなんて。

アレクに隠し事されるよりショックだよ！

9（後書き）

誤字発見したが誰にも言われないこと良いこと放置してたが直しました

どこのどことはいいません

それとキャラが定まりきらない

今が見切りのチャンスです！

10

ロベルトは別にサディストというわけではないらしいです。とりあえず、心底残念な気がしてきた。

面白味無いよ、ギャップが必要だよ。

でも、リーリヤがそう思ってるだけかもしれない。

〔そういえばアレクはいつ帰ってくるの？〕

聞いてなかった。アレクはちょっととか言ってたけど、ちょっとってどれくらい？

「明日には帰るとは思います」

〔明日か〕

だからどうしたかと聞かれるとどうも言えない。ただ、珍しい。

それと、寂しいって思っちゃう。たかが1日なのに。

〔意外に短いね〕

2、3日くらいかかるのかなとか思ったよ。まあ、ちょっとって言える時間なのかわかんない。

「アレクセイ様は普通の領域に収まらない方ですから」

〔そっか〕

実はアレクが剣とか魔法を習ってる時とかはほとんど寝てたから、どれくらい強いとかわからない。

最初は興味深々だったんだけど、私はまず魔法とか使えないからなんかふてくされちゃって。

でも大半は勝ってたな、見ていた限り。小さい頃は負けたりとかあったけど。

〔本当にアレクは何しに行ったんだろ〕

「直接お聞きになられたらいかがです？」

知りたいから聞こう。アレクが教えてくれるかくれないかはわかんないけど、聞かなきゃわかんない。

〔よし、食事しようリーリヤ！〕

「リディヤ様はお食べにならないでしょう」

〔でもほら、１人で食べるのは味気ないよ。私は食べないけど〕

むしろ食べれたら大変だ。

〔リーリヤには編み物も教えなきゃならないし〕

「…なんですか、それ。全く意味わかりませんよ」

１０（後書き）

減ろ、擦り減ってしまえ！
つかなんでまた消すんだ、私！

同じような事何回考える気だ。頻度を重ねるほど劣化

自分で自分を見切りたい

11

久しぶりに私は夢を見た。

お母さんとお父さんがいて、お兄ちゃんとお姉ちゃんとペットの猫ちゃんがいて、友達や先生がいる世界。

私は家族と話して、ふざけて、喧嘩して、笑って、泣いて、喜んだ日々。

ああ、そうだった。私はここに来る前に告白されたんだ。そして、なにも言えずに逃げてしまった。告白された事がないわけではなかった。ただ、私も彼が好きだった。

だけど、言えなかった。友達との関係を壊したくなかった。彼と付き合うことで彼が好きだと言った友達に嫌われたくないとそう思うと怖かった。

そう思っていると何かの声が聞こえ全てがおぼろげになっていった。

「…ディヤ、リディヤっ！」

起きたらアレクの顔がドアップだった。うん、心臓に悪いな。心臓ないんだけど。

「うなされていた」

うなされようにも声も表情もない人形の私にどういう判断基準を

してるんだろうか。
よく見ればリーリヤも心配そうに私を見ていた。
「大丈夫か、リディヤ？」
とりあえず、コクリと頷いてみせる。夢を見たはずだが良くおぼえていない。
意志を示すために筆記用具を握る。
〔うん、大丈夫。心配しなくて良いよ〕
とても嬉しい夢だった気もするけど、嫌な夢だった気もする。だけど、しょせんは夢だもの。
〔お帰りなさい、アレク〕
「ただいま、リディヤ」
いつもの笑みを浮かべるアレクに私は心底安心した。
〔怪我してない？〕
「危ないことしに言った訳じゃないよ、リディヤ。僕は話し合いをしに行ったんだ」
とても爽やかな笑みを不自然な程に浮かべたアレク。いや、不自然ではないけど。というか、間違っても相手を脅迫なんてしてないよねと言いたかったけど、やめておいた。
世の中には知らない方が良いこともあるさ。

11（後書き）

意味踏めい！
まあ、私の方が変ですけど。

もう腹を括る、じゃない首を括るしかない！
あ、逆逆。

首括ったら掃除が大変ですからね。穴という穴から…。

告白されたことは一回だけあります。
列車が来る踏切越し。カンカンと音が鳴り響く中で告白されました。

そんな話しはさて置き、次はリディヤが出ないかも。

見切り発車してよくここまでやったよ。
祝、見切り発車。

12

本当は嫌だ。
瑪瑙とは離れていたくない。だが、聞かれたくはない。いや違う。
僕は瑪瑙があの男の眼に触れることが死ぬほど嫌だ。もし、取られたら？
イライラしながら僕はあの男の元に向かう。牽制と忠告のためだ。
「アレクセイ殿下」
「…貴様がジェイ・アンドリュー」
見下すように見つめた。赤い髪と瞳を持った軽そうな男だとあの時に思ったが、それだけでは無さそうだな。
むかつく顔だな。顔の皮を剥いでやろうか？
「アレクセイ殿下？」
「…僕のリディヤに話し掛けた愚か者に罰でも与えようと思ったのだが止めだ」
「ば、罰」
噂にでもなったら瑪瑙に聞かれてしまうだろうから、殺、じゃない派手な事は気をつけないといけない。
それにしても、瑪瑙は寂しがって泣いてはいないだろうか？
「知りたいことがある。知っていることを全て吐いてもらうぞ」
「…なんでしょうか？」
「まず、僕のリディヤを口説こうとしたのは本当か？」

素直に青ざめ頷いたジェイ・アンドリューに不快な思いが募る。その喉を潰してしまおうか？

「まあ、僕のリディヤは素晴らしく美しく可愛らしいからな…今回は特別に許してやろう」

「ありがとうございます」

「ああ、それでリディヤのことはなんとも思っていないのだな？」

かすかに微笑み僕は冷めた目で見つめた。浮いた話しばかり上がるがこの男が婚約や結婚などの話は一切でない。

「私にはすでに心を決めた女性がいます。アレクセイ殿下のリディヤ様よりも私はその女性の方が何千倍も魅力的なのです」

「……」

「お気分を悪くさせてしまいましたか？」

「いや、全く持ってその通りだろうと思っただけだ」

その気持ちはわかる。真っ直ぐなその目に嘘偽りはみえないのだから、これはこの男の本心なんだろう。僕も瑪瑙以外の女性に魅力を感じたことはただの一度もない。

だが、この男のその相手なんて見たことはない。多分、いないのだろう。

「お前が情報を集めるのは女のためか？」

「はい。どんな人間になっても連れ去られた彼女を見つけたいのです」

12（後書き）

うっかりやった後に直ぐに書いても書かなくてもロクな文章になりゃしない
別のモノだよ

もっと被害被ったはずなのに
いい加減さに呆れるね

見切り早めに

13

〔私だって夢を見るんだよ〕

癖のある文字を書くこの方を私は人形だとは思えなかった。しなやか動きに妙に人間臭い仕草をする人形は本当に生きているかのよう。

リディヤ様はアレクセイ様の大切な方。私にとっても大切な方。リディヤ様のおかげで私はここにいて、ロベルトとも一緒にいられる。

がさつな私だがそれなりに女なのだ。家を飛び出し騎士になっても、完全には家からは離れられはしなかった。

「どんな夢を見るのですか？」

〔あんまり覚えてないよ。昔のことだったり、不思議な夢だったりして…楽しいのが多いかな？〕

多分楽しい夢が多いと付け足したリディヤ様は首を傾げた。

〔たまにアレクの肩でうたた寝しちゃうんの。一応、落ちたことはないんだけどね〕

「…アレクセイ様はご存知で？」

〔さぁ、知らないんじゃないかな？〕

何も聞いてこないし、と続けて書いたリディヤ様は飄々とそんなことを言った。これはすぐさまにでもアレクセイ様にご報告しなければならない。

血の気が引く話に頭が痛くなる。
てっきりアレクセイ様の魔法で動きそこにあるのかと思っていたのに、それは違い人格の…魂の入ったリディヤ様がご自身でしている。

もし。もしも落ちてしまうなどということがあればアレクセイ様がなにをなさるかわからない。
というか、恐ろしすぎる。

〔アレクは過保護過ぎるよね〕

確かに過保護ですが、それも仕方がないもの。貴女は普通の女性ではない。
違う。例えリディヤ様が人形ではなく人間であってもアレクセイ様は今と変わらないはず。

「アレクセイ様はリディヤ様を愛しているからですよ」
〔…よく、わからないな〕

私は生きていないのに、と続けたリディヤ様に心が締め付けられる。ミハイル陛下にはリリー王妃との間の第一王子のアレクセイ様しかいない。

〔私はアレクには綺麗で優しいお嫁さんをもらってほしいと思ってるから。そろそろ私離れしなきゃね〕
「リディヤ様」
〔もうお年頃なんだから〕

無理です。確かにアレクセイ様はお年頃ですがリディヤ様から離

れるなんて無理ですから、と心の中で突っ込みを入れた。

リディヤ様は心の中でどう思っていらっしゃるんだ。その顔にはどんな表情を浮かべているのだろうか。

いくら考えても私にはわからない。

人形に表情など浮かばない。だって、いくら人間みたいだと言っても所詮は造られた人間に模した人形なのだから。

１３（後書き）

更新は遅いわ、意味わかんないわ、暑いわで何これ！？

なんかもうどん詰まり。

やっぱあそこで私がミスらなきゃもうちょい進ん…だということはない。

にしても暑い。

夏は暑いし、冬は寒いし、なんだかなぁ。

高いところからダイブしたい。

14

やっぱい、オレ死ぬかもしれない。目の前に魔王がいるような錯覚に陥る感覚に冷や汗と顔が変に強張る。

見下すような瞳で全身を品定めするように見られ、冷たい音色を聞きながら気に障らない程度を心掛けながら話す。

アレクセイ殿下の言葉はさして物騒なモノではないのに、幻聴のような声が聞こえてくる気がしてならない。というより、目は口ほどモノを言う。

正直、殺されずにすんで良かった。

チャラい発言はもう控えよう。そのうち誰かに殺されてしまうかもしれないと思うとぞっとする。

彼女を救い出す前に死んでは意味がないのだから。

そしてだいたいの話が終わってから、アレクセイ殿下は思い出したかのように柄に手をかけた。

「とりあえず今日からは信用するよ」

「っ…！」

予想外の言葉に想像通りの行動。それに声を出さなかった自分を褒めてあげたいというか色々自分を褒めたい。

情けないほどに足は震え、今にも腰が抜けそうだ。顔に走る小さな痛みは何によって齎されたか。

壁を抉るというより斬ったその剣の刀身は恐ろしいほど輝いてい

る。下を見れば見慣れた赤い髪が落ちている。

「罰を与えるのも止めた。今回のことも許す。これは僕の八つ当たりだ」

声が出ない。というより、動けない。

「アレだけのことで僕の余裕はなくなるんだ」

壁を斬った剣を収めたアレクセイ殿下は底冷えするような笑みをその顔に浮かべた。

真っ直ぐと交わる視線。

「情けなさすぎる」

そう小さく言葉にすると嘘のように先ほどの顔は消え失せた。さっさと退散していくアレクセイ殿下を視線だけで追った。

ドサッと床に崩れ落ち顔を隠した。

１４（後書き）

風邪を引いた。
暑かったり寒かったりと最悪だ。

というより設定だけは細かく決めておくべきだった。

見捨ててください。

15

瑪瑙のいる部屋に早足で向かう。僕は早く瑪瑙に会って安心したかった。

誰にも浚われたりはしない。僕がそんな事させないんだ。リディヤはずっと瑪瑙と僕を繋ぎ止めていてくれる。

母上が僕にくれたモノは瑪瑙だ。

ずっと一緒にいるんだ。

扉に近づけばリーリヤの焦ったような声が聞こえ、蹴破るように扉を開けて部屋に入った。

「リディヤ！」

「あ、アレクセイ様っ」

リーリヤは心配そうにリディヤに触れていた。瑪瑙は魘されているようだ。それに気づいたリーリヤが起こそうとしているのだろう。

急いで駆け寄り僕も呼びかけた。

「リディヤ、リディヤっ！」

怖い。とても怖い。起きてくれ、僕を独りにしないでくれ。

パチリと目が開いたのに安心した。泣きそうな顔になっていないか心配だ。

「うなされていた」

誰が見ても瑪瑙はうなされていた。瑪瑙は自分の表情がなぜわかるのかと不思議に思っているが、あれは瑪瑙が思っているよりわかりやすい。

「大丈夫か、リディヤ？」

コクリと頷いて見せた瑪瑙は少しすると筆記用具に手を伸ばした。

〔うん、大丈夫。心配しなくて良いよ〕

そう言われても僕は不安で胸がいっぱいだ。というより、より不安になってしまうんだよ、瑪瑙。

〔お帰りなさい、アレク〕

「ただいま、リディヤ」

いつものように微笑む。

〔怪我してない？〕

なんでだろうか。僕は別に怪我をするような場所に行った覚えがない。

「危ないことしに言った訳じゃないよ、リディヤ。僕は話し合いをしに行ったんだ」

あくまでも僕は話し合いに行っただけなんだよ。ちょっと八つ当たりもしてしまったけど、話し合いもしたんだ。

壁も僕が修理代をだすし、誘拐されたという恋人も一応こちらでも探す形になっている。

〔そっか、ならいいんだけど〕

「リーリヤもリディヤがうなされていたから心配していたんだよ」

〔そうなの？〕

視線がリーリヤに向いてしまったがしょうがない。リーリヤを睨んでも何も変わらないし、僕が言ってしまったことなんだ。

15（後書き）

酒飲んでないけど、アレだ。
酔ってる！

ラム酒のきいたケーキうまっ！

勢い負かせでどりゃー

クラクラする。
はきそ

16

「なら、交渉決裂だね」

話す気がないなら片付けてしまわないといけない。

スラッと剣を抜き僕は振り上げた。

「無駄な時間は勿体無いから」

瑪瑙と過ごす時間がこんなくだらないゲスに費やすなんてしたくない。ジェイはまだ上手く使えるからともかく、話も通じない人間は嫌いだ。

「ヒィッ！」

「やめろっ、やめ」

ああ、彼女に会えない時間は悲しい。時間の無駄にしかならない。とっとと終わらせようと思っていたんだけど1人が叫んだ。

「喋るから殺さないでくれ！！」

その言葉に仕方なく寸止めした。恐怖に歪みきったその顔は醜く吐き気が死そうになる。

「ジェイ、後は任せる」

「はい。お任せください」

血は一応付かないようにはしたけど、匂いは少し付いたかもしれないな。道のりはあまり長くはないけど匂いは消えるかな。

もう近いしね。それだけ目障りな奴らが狙ってるって事だけど。

「本当にうざい奴らだよ」

誰にも奪わせはしない。僕だけのリディヤ。僕だけの瑪瑙。

「早く片付けないとな」

危険な目に合わせたくない。だから、その不安だけは全部消してしまわないと。

全部消してしまったら僕と瑪瑙は2人で幸せに愛を育むんだ。

誰にも邪魔されずに、幸せに暮らすんだ。

それは出来ない夢じゃないんだ。叶えられる夢だから。

１６（後書き）

長らくお待たせッスよ！
自転車でバランス崩して血をだらだら流してまでアニメを見たかった私ですが何か！？

耳からあんなに血が出るなんて思いもしなかったよ。
病院行くような怪我じゃなくて良かった。今もちょっと痛いけど自然治癒だ。

ま、そんなことはさておき。
…なんだろ、雲行き怪しくキャラ忘れも激しく…言い訳しました。
改訂版を書いたら内容は断然シリアスで恋愛無い薄暗いモノにできる自信がある。

明るく行きます。
小難しい物語は私には向きません。だから思いつきで進めて変な終わらせ方をします！

頭打って頭可笑しくなってるんで見切りべきです！

17

僕は優しい人間じゃない。

「瑪瑙、おはよう」

〔おはよう、アレク〕

こうして穏やかでいられるのは瑪瑙のお陰だ。僕にとっての世界は瑪瑙だ。

他には誰もいなくても瑪瑙だけがいればそれで僕の世界は正常に機能するんだ。

だから僕は優しくない。

優しく出来るのも怒ることも悲しむのも笑うことが出来るのも全てはリディヤが、瑪瑙が僕の傍にずっと一緒にいてくれたからだ。

瑪瑙の為なら僕はどんなモノでも利用するし切り捨てられる。僕のリディヤを狙う人間には容赦はしないと決めていた。

争いは好まないだろう瑪瑙には黙って僕は人を殺めていた。昔のことで瑪瑙がどれほど優しく甘い人だと知っていた。

知っていたからこそ秘密裏に事をずっと進ませていた。

「今日も綺麗だよ」

朝目を覚ましてはじめに見るのがリディヤ。それが昔からの日常だった。

〔もう、そんなこと言わないで早く着替えちゃってね〕

僕は他愛のないそんな場の空気や話が好きだ。大して意味のないような話がとても落ち着いて安心出来た。明日もそんな日常だけが続けばいいと思いながら、明日への絶望があった。

嫌でも成長する。僕は継ぎたくない国の為に働く日がくるのだと、世継ぎの為に女を抱けと言われる日がくる。

考えただけで吐き気がする。

〔アレク、どうかしたの？〕

「え、あ…大丈夫だよ」

瑪瑙だけがいればいい。僕は着替えずに瑪瑙を抱き締めた。

魔法を使えば一瞬ですむけど僕はそうはしない。

子供の頃は瑪瑙に着替えを手伝ってもらった。今もボタンを掛け間違えば可笑しそうに笑って直してくれる。

嫌いにならないで、離れていかないで、独りにしないで、僕の傍にずっといてよ、瑪瑙。

僕はただ貴女に嫌われたくない。大切していたい。

だから、僕を狂わせないでくれ。

17（後書き）

…改訂版はこれとは全く別物になりそうだなぁ。

性格とか性格とか。

ストーリーは大ざっぱなこちらより幾分か良くなる程度。名前まで変えちまおうぜ！、とか思っちゃってます。

まぁ、あまり無機物恋愛の内容はお粗末だし改訂版やんなくてもいいかな。

名前ってぶっちゃけ難しいよな！

今年は色々あった。

血は流したし、婆に一服盛られ腹を壊したし、姉は車に跳ねられ、婆に俺の楽しみにしていたココアを飲まれ、兄は事故ったし、俺の寿命の縮まるようなことを両親二人ともしたし、姉が…

思い返すだけで沢山あった。時系列は変だが。

普通か。

まぁ、愚痴愚痴言っても仕方ない。

アレクはアレクサンドルの略じゃないよ。とか思いながら更新していきます。

頭弱い私の駄文に飽きたら見捨てましょう。屍となんらかわりありません、つか連載休止の記事を書く時期を誤ったか。四日しか立ってないのに更新かよ。

溜めるのは性に合いません。
だから、近いうちに執筆中を空にするために暗躍しながら更新します。

新しい連載するつもりないんで。
兎狼さらばっ！

こんなに長々後書きするなら連載頑張れ自分！
久しぶりに聴くキャラソン素晴らしいっ！

本当、見切るなら今すぐポチッとな！

18

私はアレクは純粋なんだと思うの。

駄々をこねて欲しいほしいと泣き叫ぶような小さな子供。自分のモノが奪われたらムカついて相手を泣かせてしまったりする子供のようだと思った。

アレクはもう玩具をもらって喜ぶ歳ではないんだけどね。

「え、あ…大丈夫だよ」

やっぱりなんか変だよね。何かがおかしいような気がした。

きっと、暫くは離れてたから寂しいとか何とかだよ。

そう思っていたらアレクはこっちに着替えないまま来て私を抱き締めた。

こうなってしまうと私は正直どうしていいのかわからなくなる。

「少し、このままでいさせて」

その言葉に私はやっぱり、出かけた先で何かあったのかもしれない。

聞こうと思えば聞けたと思う。

包み隠さず全てを話してくれたかもしれないけど、私は聞かなかった。そして、アレクも私に進んで話さなかった。

ソッとアレクの背に腕を回して抱きしめ返した。

私は貴方を安心させる言葉も吐けない。ただ抱き締めることくらいしかできない。　でも、それで良かった。

この口が音も奏でられない偽物だったことを心の底から良かった。

私の言葉が音色にならなくて良かった。私に声がなくて良かった。

貴方に届くことのない想いで良かった。

私はとても酷い女。

救いようのない愚かな女だ。

18（後書き）

猫さわりたい猫さわりたい猫さわりたい猫さわりたい猫さわりたい猫さわりたい！

私に懐くような子猫が良い！

などとほざきながらコツコツ書いていました。嗚呼、猫！

そろそろ、真面目な本編にとか考えてるんだけど…最後はどう終わるか決めてるけど中身はちょくっとしか…

はっ、後！

感想初めてもらって感動したんだけどアレって私どう反応したらよかったんだろうかなと1日悩みました。悩んだ結果、放置しました。

そして今、感謝を述べます。ありがとうございます、本当。

なるべく早く早く書こうと頑張りました。

首になりそうだと姉が電話してきて、遅くなりましたが。後なんやかんやで夜に…

…カップめん食ってましたゴメンナサイ。

まだスランプなんで、若干のやる気で乗り越してご免なさい。

いい加減　勇者の方も更新しなきゃとか考えてるんですけど。

というか、この無機物恋愛が完成したら改訂版やるとか言ったけど

あれやりません。やるとしたら、コレを元に内容をマトモにして性格が大きく変わった奴がやりたい。

まあ、やりたくないがアイデアがっ！

とりあえず、完結しないのは変なアイデアが湧き上がり色々としかも入れようないし。

とりあえず、読んで下さってる方には心からの感謝をします。合わなかったら、我慢せずに見捨ててください。

19

〔第一回じゃんけん大会を開催したいと思います！〕

突然でもうしわけないなぁとか思うけどそこは置いておこう。

〔拍手〕

すかさずそれも出すとアレクは素直にパチパチと拍手をしたが、リーリヤは数秒固まったようでアレクの拍手の音で現実に戻って慌てて拍手した。

ロベルトはパチクリと見開いた目で呆然としていたがゆっくりと手を叩いた。

「リディヤ様、その…じゃんけんとはなんでしょうか？」

真剣な面持ちでそう聞かれると困る。子供のお遊びだしね。リーリヤもやけに緊張した感じで私の答えを待っていた。

「じゃんけんは遊びだよ。昔リディヤと二人でしてよく遊んだね、懐かしいな」

〔遊び方はね…〕

明らかにほっとした二人を見てつい、グーは拳骨、パーはビンタでチョキは目潰しと教えたらどうだったんだろ？

悪戯心を抑えて説明した。

〔ルールもわかったことだし、三回先に勝った方が勝ちで総当たり

ね〕

アレクの気分転換になればいいなとか思って結構気軽に思ってたんだけど、なんだろこの白熱状態？

「リディヤ様、私達はのけ者ですね」

〔そうだね〕

結果、アレクとロベルトがやたらと強かったです。今は二人であっち向いてやってます。

美形があっち向いてホイとか…

「なぜ私達はストレート負けだったんでしょうか」

〔わかんないや〕

被って叩いてとかじゃなくて良かった。アレクにそれ教えなくて良かった。本当に良かった。

明らかにこの戦いに終わりは見えない。ちなみに、第一回じゃんけん大会の勝者はロベルトでした。

そして、あっち向いてホイは決着が付かなかったです。

「ロベルト、僕は君を甘く見ていたよ。君は僕が思っていた異常に強者だ」

「私には勿体無いお言葉です」

「いや、本当に強い」

うん、本当に勿体無いお言葉かも。たかがじゃんけんなのに。

第二回は絶対にやらない。別に最下位が悔しかったわけじゃない

もん！

19（後書き）

雨ばかりだ。
嫌になる。

頑張って1ヶ月に1回は更新します。

だらだら更新します。
もうだらだら更新したいです。
あまりこっちに構えないです。

本当は昨日更新する予定でしたが眠かったから。

韓流なんて嫌いだ。
アニメが大好きだ！

くしゃみが止まらない。
いや、止まらないわけじゃないんだけどね。

20

最近、アレクは私をリーリヤに預けて出歩くことが多くなった。ロベルトいたりいなかったり、その間の食事はメイドが待ってきて私から二人は離れることもない。

気にはなるが私には分からない話だ。二人は私には何をしているとかは一つもいわない。人形に話しかけるような人はいないし、アレクの手中にいる人の近くで変な話しなどしない。

私だってアレク本人に向かって自分の心からの本音なんて語らない。足かせにしかならない私が軽いことを言えるはずがないのだから。

私に声がなくて良かった。

心に反応して無意識に言葉を発せなくて良かった。

「リディア、まだ怒ってるかい？」

〔最初から怒ってないよ〕

表情の出ない人形で良かった。

「でも…」

〔怒ってないから〕

人の体温を感じられない身体で良かったと本当に思う。

〔気分転換になったし〕

私は忘れてしまいたいと思ってる。アレクが私を愛し、私もアレクを愛しているという可笑しな話しを忘れてしまいたい。

離れるようになってアレクを見ていない私はホッとしているんだ。実はアレクは私を愛していない。きっと自分の都合の良い夢をみてるんだって。

一国の王子様が人形に恋なんておとぎ話みたいじゃない。

だから、コレも全て長い夢でフッと目が覚めた瞬間には懐かしい天井、お母さんの声が聞こえてくるのはずよ。ご飯出来たわよっていつもの日常が戻ってくるの。

「そうかい？」

〔うん〕

全部、嘘。

全部、夢なの。

全部、私の夢の中の話。

２０（後書き）

危うく間違えて書き途中の２１を投稿するところだったぜ。

まぁ、順番はあまり関係ないかな。

本当は違う方更新するはずだったけど、難しく考えすぎて書けない。

一応、ハッピーエンドかバッドエンドで無機物恋愛は終了します。

これは決定事項みたいなモノですね。あ、後日談などやる気もないからどっちが終了。

というか、半ばこれは勢い試し連載です。

二次創作ならまだちょっときっとましになりますが、オリジナルとかは名前決め面倒、敵登場が面倒、下手にキャラ多いと忘れる。

頑張って書いてますがノロノロいきます。

21

ああ、幸せになりたい。
幸せになりたいなんて人間なら誰でも思うことだし普通の願いだ。

「瑪瑙」

貴女は綺麗だ。どんな女性だろうと適う者などいない。例え作り物の器だとしても貴女のために使われた物は特別な物ばかりで、他者から見たら豪華な金品になる物としか見ないだろう。

「寝てるの？」

僕と同じように眠る、自分の意志を持つ人と変わらない愛らしい女性だ。

好きになって何が悪い？
僕はただリディヤが大好きだった。いつも見守ってくれる僕が母上から貰った大切で特別な人形。

「好きだよ」

幼いなりに僕はリディヤを守りたくて仕方なかった。
汚したくなくて、傷つけたくなくて、壊したくなくて。包むように優しく抱き締めた。女のようだとあざ笑われても別に僕は構わなかった。

「どうしたら僕を」

母上からの贈り物だからという訳じゃなかった。一目見たときから魅せられていた僕はその日からリディヤを幼心なりに好きだった。

純粋だったはずの想いはいつかどす黒くなっていた。だけど本質は変わらない。

君が好きだと、愛していると騒ぐ心は魂は何も変わりはしなかった。これだけは一生変わるはずなんてない。

「ねえ、瑪瑙」

一緒にいたい。僕はそのためなら人形になったっていい、王族をやめたって良い、全て捨ててもいいんだ。

望んでくれれば僕は何でもする。

「僕は瑪瑙を一生愛する」

美しい黒髪を一房だけ手に取り僕はゆっくりと唇を寄せた。

「誓うよ」

だから、一言だけ君から欲しい言葉があるんだ。

22

アレクは優しい子だ。時々とても凄いことを言い私を心の中で青ざめさせるが、とても優しい子なんだ。

私のことになると結構むちゃくちゃなことを言って罰しようとするが、普段は使用人にも兵にも気さくに話し掛けている。

まぁ、王族としてはだけど。特に見下すとか差別とかしない。

花も好きみたいで良く散歩をしながら眺めたり、自分で密かに植えて育てたりしていた。その姿はまるで親に黙ってペットを飼ってるみたいで可愛かった。

だけど護衛に黙っていくのは不用心だと注意したことがある。

手先も器用みたいでパーティーの時の髪を結っているのはアレクで、巷で流行りの新しい髪型ばかりだった。

メイドの女の子達の輪に入りドレスやらネックレスなどは何が流行りかなど話して口論する姿はまるで違和感なく女の子のようだった。

ちょっと王子様には見えない。というかアレクは王子様だったんだねとかつい思い出すことがたびたび。

一時期、勘違いした男がアレクを…いや、これは本人の名誉の為に黙っておこう。

とにかく、アレク、アレクセイは一国の王子様でとても偉くて私なんかじゃ釣り合いは取れないし、私なんかが一人占めして良い人

じゃない。

それは最初から決まっていた。

決まってなくても私は人形でアレクは人間。人に作られた私が人に恋し愛するなんて道化みたい。

それを見て滑稽だと笑い者になる。

貴方の隣にいたからこそ私は受け入れられない。

貴方を見ていたからこそ私は受け入れられない。

貴方の想いだからじゃない。

誰に対しても同じ。

私が人じゃないからこそ私は受け入れられない。

私が人なら貴方の想いだけは受け入れられない。

22（後書き）

あれ、更新せずに放置してた。
今、気づいたよ。

いやぁ、気づいてよかった。

見切りの付け所です。

今は二次元にお熱ですからな。
元があるだけやりやすい？

いややってることは一緒だから変わらないね。名前と性格を考える手間が省けるだけさ！

頭痛い。
では、見切りお願いします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1249u/

無機物恋愛

2011年10月7日12時51分発行